道南農業経営者育成だより

■発行者■
道南農業経営者
育成対策協議会

「新時代を切り開く」

道南農業経営者育成対策協議会
会長　森　隆　志

当協議会会員ならびに各関係機関の皆様には、日頃より当協議会の活動に対しご理解とご協力を賜り厚く感謝いたします。

さて、我が国の経済は、幅広い分野での物価上昇により実質購買力の低下が顕著である一方で、外的要因のインバウンド需要がけん引となり、経済活動が上向き傾向の一面を見せておりますが、その一方では業者間での集荷競争激化に伴う米価高騰がいわゆる「令和の米騒動」の要因とされており、国内の消費動向については外食産業が上向き傾向であるものの、家庭消費は物価高の背景を受け抑制されている状況にあります。

また、昨年十月に高市早苗氏が女性として初めて内閣総理大臣に就任し、農業や地方創生、日本再生を重要政策に掲げておりますが、農畜産物の生産現場においては、燃料・肥料・飼料をはじめとした各種生産コストが高止まり傾向であることに加え、流通コスト・人件費といった諸経費等の上昇にも歯止めが掛からない現状になっております。更に近年では猛暑や集中豪雨・曇天による日照不足・局地的な水不足など、気候変動による生産環境の変化が著しく、農業経営においては年を追うごとに厳しさを増しております。

当管内においても、農業経営者の減少・高齢化・担い手不足・耕作放棄地等により、生産基盤の減少や地域農業の弱体化が懸念される中、農地保全や地域コミュニティの維持が急務となっております。このような課題を乗り越えるためには、各関係機関と密接な連携を図りながら、地域担い手の育成強化と並行した外国人材の活用による労働力確保、スマート農業技術活用による農作業の省力化や地域一体となったスケールメリットを生かすことによる各種生産コストの低減対応、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）に則した取組みによる農業経営が今後は大いに求められるものと考えております。

このような状況の下でありますが、この一年間も生徒の皆様、保護者、ご家族、教育現場の諸先生方におかれましては、様々な行事活動の実践には一言では言い表せない感情であります。

そして三年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。卒業生の皆さんは、この大切な三年間の学びと経験を、今後も世界的な農業生産環境の変化に対応した「新時代を切り開く」姿勢について大いに期待しております。最後になりますが、当協議会に多大なるご支援・ご協力を賜った市・町・関係機関の皆様と共に、校長先生をはじめ教職員の皆様には農業経営後継者の育成指導に更なるご尽力を賜りますようお願い申し上げ挨拶といたします。

「将来の道南農業の担い手育成に向けて」

北海道大野農業高等学校
校長　芳賀雄太

道南農業経営者育成協議会関係の皆様には、日頃より本校の専門教育の推進に対し、多大なるご理解とご協力をいただき深く感謝を申し上げます。

また、本協議会の今年度の事業推進にご協力をいただいた関係機関の皆様にも併せて感謝を申し上げます。

さて、令和のコメ騒動が始まり時間経過がしたものの、コメの生産量や流通量、そして価格水準が話題として取り上げられる報道等が日々続いています。

新型コロナの発生以降続く世界的な経済混乱、各種の原材料や物価の高騰、これらが私達の身の周りにあ

る様々な物の需要と供給のアンバランスを加速させ、日本人の主食であるコメもその対象となってしまっています。消費者の皆さんの立場からは、安くて新鮮、おいしいコメが購入しにくい状況となっている一方、生産者の皆さんの立場からは生産価格に見合う価値という視点では、現在の米価が決してただ高価格なだけではないことや消費者の皆さんのコメ離れを危惧する材料になっていることだと考えます。

このように主食のコメの現状にとどまらず、私達の食生活を支える多くの農畜産物の生産が温暖化等の気候要因を含め環境変化の激しい中で不安定に揺れ動いており、消費者である私達の生活に大きく影響を及ぼしていることを実感できます。そのなかで、ＳＤＧｓで表現されるように多くのヒト、モノ、コトに「持続可能性」が求められるなか、農業を学ぶ農業高校生、そして将来農業を担おうと考えている農業経営予定者の生徒の皆さんに将来に向け様々な専門学習に前向きに取組む研修プログラムに参加してもらっています。

今年度は、九月に渡島農業改良普及センターでその概要や役割と土壌診断の実際についての体験学習を、十一月には、札幌近郊を中心に北広島のクボタアグリフロントでＩＣＴを活用した農業機械、施設園芸等の先端技術を、酪農学園大学では大学施設とその研究活動を、北海道農販株式会社、越浦パイプ株式会社ではビニールハウスの骨格部やビニール部分の製造過程を、福山醸造株式会社では醤油の製造工程等をそれぞれ視察研修させていただいております。

年明け令和八年二月には、農業講演会と激励会を予定し本年度の事業を終了することとなり各訪問先の企業や大学、関係職員の皆様には、ご多忙の中、将来の農業の担い手のために貴重な時間と体験、学びの場を提供いただいたことに改めて深く感謝をいたします。

最後に、渡島、桧山管内の各市町村をはじめ、本協議会の運営に関わる関係機関の皆様には、本校生徒の三年間の専門教育活動の様々場面でご支援をいただき、無事卒業にたどり着くに至ったことに感謝するとともに、今後とも本校の農業経営者教育の推進に向け、なお一層のご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げ、結びとさせていただきます。

「次代を拓く」

渡島農業改良普及センター
所長　植　村　美　徳

三年生の皆さん、ご卒業誠におめでとうございます。今日の日を迎えられた皆さん一人ひとりの努力に、心から敬意を表します。

大野農業高校は、道南唯一の農業専門校として、長年にわたり北海道農業を支える人材を育成してきた、歴史と伝統のある学校です。皆さんはこの三年間、農業の基礎から実践までを学び、現場で生かせる知識と技術を着実に身につけてこられました。その経験は、これからの進路において大きな力となることでしょう。

道南農業経営者育成対策協議会では、渡島・檜山管内の市町や関係機関と連携し、農業後継者の育成・確保に取り組んでいます。関係機関訪問では、農業改良普及センターにもお越しいただき、渡島農業の概要や普及センターの役割について学んでいただきました。

渡島地域は、水稲「ふっくりんこ」をはじめ、ながねぎ、トマト、にら、カーネーション、酪農など、多種多様な農業が展開されて「農業の宝石箱」といわれています。

近年は気候変動の影響が顕著となり、猛暑や集中豪雨など、これまでにない環境変化への対応が求められています。その中で、土壌診断に基づく施肥設計や、生育状況を踏まえたきめ細かな管理は、基本技術としてその重要性がますます高まっています。

また、ＩＣＴやデータを活用したスマート農業の導入が進んでいます。センサーやドローン、自動化技術などにより、作業の省力化や生産性の向上、経験や勘に頼らない安定した農業経営が可能となりつつあります。

これから皆さんは、それぞれの道で農業と関わっていくことと思います。農業を取り巻く環境は、少子高齢化による労働力不足や生産資材価格の高騰、食の安全・安心への意識の高まりなど、厳しさを増していますが、同時に、新しい技術や発想で次代を切り拓く大きな可能性を持っています。

新たな環境の中で、思い悩むこともあるでしょう。そのようなときは、一人で抱え込まず、家族や友人、職場の先輩や同僚、学校の先生、ＪＡ、市町、普及センターなど、周囲を頼

ってください。互いに支え合いながら、日本の食料と農業、そして地域の未来をともに築きましょう。地域振興を担皆さんの活躍に、大きな期待を寄せています。

結びに、育成対策協議会の皆さまの長年のご尽力に深く感謝申し上げます。地域農業の未来を支える皆さまの熱意に敬意を表すると共に、今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げ挨拶といたします。

農業経営予定者研修に参加して

農業科学科三年　西谷潤紀

農業改良普及センターは、地域農業の発展を目的として、農業者に対する技術指導や経営支援を行う専門機関のことです。こちらでは地域の自然条件や作物特性に応じた普及活動を展開し、農業の安定生産と品質向上を支えています。渡島地域は、水稲や野菜、畑作、果樹など多様な農業が行われており、気象条件や土壌特性を踏まえた栽培管理が重要です。

施設見学では、土壌や作物の分析を行う設備や、農業者への指導に活用される資料を学びました。職員は調査結果を分かりやすく農業者へ伝え、現場で実践できる形に落とし込む役割を担っていることが印象に残りました。このような普及活動は、地域農業を支える重要な取り組みです。

中でも重要なのが土壌診断であり、これは人の健康診断と同様に、作物が健全に生育できる環境かを把握するために欠かせません。土壌診断では、土壌の種類や物理性、化学性を調べ、適切な施肥や管理方法を検討するそうです。土壌硬度の測定は、作物の根が伸びやすいかを確認するために行われ、硬すぎる土壌では根の生育が阻害されることが分かりました。また、土壌ｐＨの測定では、作物ごとに適した酸度があり、数値が合わないと養分吸収が低下することを学びました。ＥＣ測定は、土壌中の肥料分の過不足を把握する指標であり、数値が高すぎると生育障害を引き起こす可能性があるそうです。

これらの診断結果を基に、石灰資材や肥料の施用量を調整し、作物や圃場に適した土づくりを行うことが重要です。適切な土壌管理は、環境への負荷軽減にもつながり、持続可能な農業の実現に貢献するそうです。

今回の研修を通して、土壌診断の重要性と、農業改良センターが地域農業を支える存在であることを改めて理解することができました。

広域視察研修に参加して

農業科学科三年　吉田稜平

私は今回の広域視察研修で農業に関する事業や取り組みを様々な視点から学ぶことが出来ました。日本の食を支える北海道の、将来の自営農業を見据えた先進的な農業関連施設を視察し、生産、加工、流通の全体像を具体的に理解することが出来ました。

最初の視察はまず福山醸造の工場を見学させてもらいました。古くから調味料として北海道の食卓を支えた企業の食に対する意識を感じられ、とても刺激を受けるとともに、自分らが学校で学んだ生産とは違う視点を感じることが出来て新鮮でした。福山醸造では醤油の作り方を学び、昔ながらの赤レンガで作られた工場は壮観でした。

次の研修は酪農学園大学で、北海道に適した稲栽培と農業のあり方について学びました。昔から米農家さんが取り組んできた北海道の冷涼な土地に適した稲を作る過程と功績について話を聞きました。自分たちが行ってきた生産の過程をより専門的に研究していて、やはり大学の研究者はすごいなと感じました。

二日目に入り、クボタアグリフロントに行きました。クボタはトラクターのイメージが強かったのですが、話を聞いていると先進的で人の手に頼りすぎず省力化できるスマート農業の開発に取り組んでいて、未来を感じました。さらに、農業を広める活動も盛んに行っており、古くから日本の農業を支えてきた企業の努力が伝わってきました。

次の研修は北海道農販株式会社に行きました。ここではビニールハウスに使用するビニールと栽培に使うマルチを生産していました。これまでに視察したところとは違い、農業に近いところで裏方として支えている企業の話を聞けてよかったです。マルチ一つをとっても栽培する野菜によって幅が違ったりそれぞれ農家さんのオーダーで作ったりしているところがすごいと思いました。

最後は越浦パイプ株式会社に行きました。ここではビニールハウスに使用するパイプを生産していました。パイプを曲げる機械がとても大きくインパクトが強かったです。こちらも農家さんのオーダーによって大きさや規格などを変えていて、決して目立つ分野ではないですが農業をするにあたって必要不可欠な働きをしていて素晴らしいなと思いました。

今回の研修で、農業に関する知らなかった情報を多く学ぶことができ、今後私たちが就農していくときに確実に活かすことが出来ると思いました。

このような貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。

地域を担う農業経営者たち

農業科学科三年　岡　田　龍　斗

○今後の抱負

私は高校卒業後、農業に従事し食を通して人々の生活を支える存在になりたいと考えています。農業は作物を育てるだけでなく、環境や地域社会、経済とも深く関わる重要な産業であり、私たちの暮らしを根本から支えています。これまでの学習や実習を通して、農作業の大変さを知ると同時に、自分の手で育てた作物が形となり、人の役に立つことに大きなやりがいを感じました。

今後は、農業に関する知識や技術をさらに高め、より専門性のある力を身に付けていきたいと考えています。近年の農業は、高齢化や後継者不足に加え、気候変動や環境問題など、多くの課題を抱えています。そのような現状を正しく理解し、課題解決に向けて自分に何ができるのかを考え、行動できる人材になることが目標です。また、生産だけでなく、流通や販売、消費者との関わりについても学び、農業の魅力や価値を分かりやすく伝えられる力を身に付けたいです。

将来は、これまでに学んだ知識や経験を生かし、日本の農業を支え、次の世代へつなげていけるよう努力していきたいと考えています。そのためにも、日々の学習や実習に真剣に取り組み、失敗を恐れず挑戦し続ける姿勢を大切にしたいです。また、現場で求められる判断力や責任感を身に付け、周囲から信頼される農業人になることを目標として努力していきます。

○印象に残った研修

私が最も印象に残ったことはクボタアグリフロントの農業の現状や未来について学ぶことができた研修です。この研修を通して、農業は作物を生産するだけでなく、環境や地域社会、経済とも深く関わる重要な産業であることを改めて実感しました。普段の実習では生産の現場に目を向けることが多いですが、研修では農業全体を広い視点で考えることができ、とても貴重な経験となりました。

特に農業が高齢化や後継者不足、気候変動など多くの課題を抱えているという話が印象深かったです。その一方で、農業機械や最新技術を活用することで、作業の効率化や負担の軽減が進められていることを知りました。中でも、クボタアグリフロントの取り組みのように、技術や情報発信を通して農業を支える活動は、これからの農業にとって重要だと感じました。

この研修を通して、農業には生産以外にもさまざまな関わり方があることを学びました。今後は、農業に関する知識や技術をさらに深めるとともに、農業の魅力や価値を多くの人に伝えられる力を身に付けていきたいと考えています。また、研修で学んだことを日々の実習や学習に生かし、将来の目標にもつなげていきたいです。

農業科学科三年　黒田悠介

○今後の抱負

私は将来、自家の農業を継ぎ農業経営者になりたいと考えています。高校を卒業後はさらに農業の知識や技術をつけたいと考え、春から北海道立農業大学校に進学することを決めました。私はここでスマート農業などの最新技術の知識や農業の技術をさらに磨いたり、自分が将来就農した際に自家で使える農業の新しい発見を何か一つでも見つけたりしたいと考えています。自家の農業をより良くさせるために、一日一日を大切にして過ごし成長していきたいです。

新しい環境では、楽しみのこともあれば、不安なことや困難な場面に会うことが多いと思います。楽しみなことは、新しい仲間ができることや自分が知らない農業を体験できるということです。不安なことは、初めての寮生活なのでうまくいかないことがあると思いますが、それでも腐らず高校生活や野球部で培った粘り強さと協調性を活かして、まずは寮生活に適応し体調管理をしっかりできるように頑張ります。また、寮の食堂のご飯がとても美味しいとのことなので、太りすぎないように食生活にも注意していきたいです。

私は、今後の様々な困難を乗り越えて、将来は地域に貢献できる農業経営者を目指して頑張っていきます。

○印象に残った研修

私が一番印象に残った研修先は、渡島農業改良普及センターでの学習です。研修先では、まず始めに職員の人たちがスライドを使って普及センターの役割などを分かりやすく説明してくださいました。普及センターは渡島管内を管理しておりとても幅広く活動し農業者経営者を支えているところなのだと知りました。また、農業改良普及センターは全道に本所が十四ヶ所、支所が三十ヶ所あり、普及指導員という国家資格を持っている職員が農業者に農業の技術の指導や農業に関する情報を提供し、農業者の支援を専門としていること理解しました。

普及センター内の見学では、数億円もするとても高額で精密な土壌分析をする機械が置いてあり、その機械を見て話を聞いた時、とても驚いたのを覚えています。さらに貫入式高度計を用いた土壌硬度の測定をし、耕盤層を見ようとしましたが残念ながら柔らかい土壌しかなく見られませんでした。

午後からは渡島管内のそれぞれの地域から持って来た土に水を加えてよく混ぜた後に、ｐＨとＥＣを測りそれぞれの土の特徴を分析しました。またｐＨ矯正の計算方法、肥料計算などのやり方や作物が好む土壌の状態などを学ぶことができました。

今回の訪問研修や広域視察研修で貴重な体験をすることができました。今後、これらの経験を活かしていけたらいいなと考えています。このような農業の勉強ができる機会を設けてくださったの皆さんに感謝いたします、ありがとうございました。

農業科学科三年　西谷潤紀

○今後の抱負

農業高校での学校生活を通して、私は命の大切さを深く学ぶことができました。作物や家畜を育てる中で、毎日の管理や観察を怠らず、命と真剣に向き合うことの重みを実感してきました。この経験は、教科書だけでは学ぶことのできない貴重な学びだったと思っています。

卒業後はリハビリの専門学校に進学する予定です。一見、農業と医療は違う分野に見えますが、人の回復を支えるリハビリの仕事も、命や生活に寄り添う点で共通していると感じています。農業で学んだ、相手の状態をよく観察し、小さな変化に気づく力は、リハビリの現場でも必ず役立つと考えています。また、農業高校で身につけた責任感や継続する力は、人の体と向き合う仕事においても重要です。利用者一人一人の状態に合わせ、根気強く支援する姿勢を大切にしたいです。

今後は専門的な知識と技術をしっかり身につけ、農業で学んだ命を尊ぶ心を忘れず、信頼されるリハビリ専門職を目指して努力していきたいです。そのためにも、専門学校では授業や実習に真剣に取り組み、基礎から確実に理解していきたいと考えています。相手の立場に立って考え、安心して任せてもらえるような対応力を身につけたいです。農業高校で培った命と向き合う姿勢を大切にしながら、人の支えとなれる存在を目指して成長していきたいです。

○印象に残った研修

私が特に印象に残っている研修は、北斗市の農業改良普及センターで行われた地層調査と土壌に関する学びです。この研修を通して、それまで何気なく見ていた「土」が、実は農

業を支える非常に重要な要素であることを強く実感しました。地層調査では、土は一層だけで成り立っているのではなく、表層土や心土など複数の層から構成されており、それぞれ性質や役割が異なることを学びました。特に、作物の根が張る深さや水はけの良し悪しが、地層の違いによって大きく左右されるという説明は、とても印象に残っています。

また、実際に土を掘り、色や手触り、湿り気を確かめることで、教科書だけでは理解しきれなかった土壌の違いを体感することができました。普段の農作業では、作物の生育状況ばかりに目が向きがちですが、その下にある土の状態を知ることが、安定した収量や品質の向上につながるのだと感じました。この研修を通して、農業は目に見える作物だけでなく、目に見えにくい基礎部分を理解し、管理することが大切だと学びました。

今回の経験は、今後の農業実践において、土壌を意識した栽培管理を行うきっかけとなり、自分の農業に対する考え方を大きく変える貴重な研修となりました。

農業科学科三年　廣瀬　樹

○今後の抱負

私は将来、農業関係の職業に就き、日本の食や地域を支える仕事に携わりたいと考えています。高校三年間を通して農業について学ぶ中で、作物の栽培だけでなく、環境の保全や地域経済、食料自給率など、農業が社会全体に大きな影響を与えていることを実感しました。また、授業や実習を通して「もっと農業について深く学びたい」「自分の住んでいる地域以外の農業も見てみたい」という思いが強くなりました。その思いから、より専門的で実践的な農業を学ぶことができる青森県営農大学校への進学を決意しました。青森県は気候や作物の特徴が異なり、北海道とはまた違った農業の形があるため、異なる地域の農業に触れることで、自分の視野を広げられると考えています。

これまでに参加した農業普及センターやクボタアグリフロントなどでの研修では、実際の農業現場を見学し、最新の農業技術や経営の工夫について学ぶ貴重な経験を得ることができました。特に、ＩＣＴや機械を活用して作業の効率化や省力化を図り、人の負担を軽減しながら生産性を高める取り組みに強い魅力を感じました。農業は体力や経験だけでなく、科学的な知識やデータ、技術の活用が重要であり、時代とともに進化している産業であると実感しました。

農学校に進学した際には、座学だけでなく実習や現場での経験を通して、栽培技術、土壌管理、病害虫対策、農業経営など、幅広い分野の知識と技術を身に付けたいと考えています。また、日々の学習を大切にし、自ら疑問を持ち、積極的に学ぶ姿勢を忘れずに努力していきたいです。将来は、これからの農業を支え、地域や社会に貢献できる人材になることを目標としています。そのために、基礎知識をしっかりと身に着け、責任感と向上心を持って行動し、農業の発展に役立てるよう精一杯頑張っていきたいと考えています。

○印象に残った研修

私が一番印象に残っている研修先は、クボタアグリフロントでの研修です。そこで目にした完全閉鎖式植物生産装置は、外部環境に左右されることなく、光や温度などを人工的に管理することで、安定した作物生産が可能である点にとても驚きました。天候や季節に影響を受けやすい従来の農業とは異なり、計画的に生産できるこの技術は、今後の農業において大きな可能性を持っていると感じました。また、従来の農業では体力的な負担が大きい作業が多いですが、この技術を活用することで作業効率が飛躍的に向上し、さらに人手不足の解消にもつながると感じました。本研修を通して、農業には栽培だけでなく、機械や技術、経営など多くの側面があることを学び、自分自身がまだ農業初心者であるということを改めて実感しました。専門学校に進学した際には、基礎知識から実践的な技術まで幅広く学び、日々の努力を積み重ねていきたいと考えています。そして、農業について深く学び続けることで、これからの農業の発展に貢献できる人材になれるよう、精一杯努力していきたいです。

農業科学科三年　吉田　稜平

○今後の抱負

今まで学校で様々な形の農業生産を学んで来ましたが、今回の研修でこれまでのイメージとは全く違う農業の形を学ぶことができました。今回の育成研修で自分の中の農業の根幹の部分がすごく変わり、それが進路にも影響しました。これを機に自分は北海道から、全国の農業を広める仕事に就きたいと強く考え、北海道農業協同組合学校に進学することを決めました。

この研修で先進的なスマート農業から、農業を通じて昔から北海道を支えてきた企業の働きを体感することができ、色々な刺激を得るとともに自分の具体的な将来像をはっきり認識することが出来たと感じます。これまでの農業高校で学んだ一次産業に留まらず農業の六次化や、もっと農家さんが働きやすい環境を作るスマート農業を分析し普及することについて取り組みたいと考えています。農業の第一線ではなく縁の下の力持ちとして農家さんを支えていきたいです。

○印象に残った研修

印象に残った研修場所は酪農学園大学です。酪農学園大学ではここ北海道の冷涼で作物が育ちにくいとされてきた土地で栽培することができるような品種を作り、道南から始まった水稲栽培とブロッコリーの根こぶ病の発症する原因と予防するための土壌改良などの研究内容の話を聞きました。水稲栽培の研究では生産が始まる前から米農家さんと研究者さんが取り組んできた北海道の土地に適した稲を作る過程とその苦労した様々な点、初めて出来た北海道米の功績について話を聞きました。様々な品種を掛け合わせ、色々な組み合わせを試してきて今の北海道の広大な土地で日本の食卓を支える美味しい世界に誇れるブランド米が生産されていると思うと果てしない努力と研究がされてきたんだなと感じ、その熱意に感銘を受けました。

他にはブロッコリーの根こぶ病についても研究していて、耐病性がある品種、土壌のｐＨに適した品種などで発症する可能性と条件が違ったりしていて、様々な視点からブロッコリーを観察、原因へのアプローチを実践していてやはり農業を学ぶことを一番に置いて専門的に研究している大学はこれまでに高校で学んできたこととはレベルが全然違うと感じ、やはり大学の教授や学生さんはすごいと感じました。私もこのレベル以上になり北海道の農業を支えていくことができる人材になりたいです。

令和七年度　事業報告

五月十日
農業経営予定生徒名簿作成
農業経営把握学習等
五月十九日
道南農業経営者育成対策協議会
年度始総会
九月十八日
関係機関訪問研修
（農業改良普及センター）
《研修内容》
・農業改良普及センターの
業務内容
・渡島管内の農業の概要
・普及センター施設見学
・農業振興センター
土壌分析室見学
九月十八日
実技研修「土壌診断研修」
（農業改良普及センター）
《研修内容》
・土壌硬度の測定
・土壌ｐＨ、ＥＣの測定
・土壌診断結果の活用法
十一月四日～五日
広域視察研修
・クボタアグリフロント
・酪農学園大学
・北海道農販株式会社
・越浦パイプセンター
・福山醸造株式会社
二月五日
農業講演会
講師　ＡＧＲＩＧＡＴＥ
代表取締役　左今克憲　様
演題
食農業界の起業家の半生から学ぶ
～今から準備できる「はたらく」の楽しみ方～
二月五日
農業経営者育成研修報告会
就農等激励会
三月一日
機関誌
農業経営者育成だより
第三十五号発刊

農業クラブ対外成績

◎南北海道学校農業クラブ連盟
実績発表大会（壮瞥高校）
・発表分野Ⅰ類　（優秀賞四席）
農業科学科三年　七尾　茉里香
農業科学科三年　三浦　陸
農業科学科二年　生田　雫
農業科学科二年　小野寺　葵　大
・発表分野Ⅱ類　（優秀賞二席）
園芸福祉科二年　小林　孝太郎
園芸福祉科二年　山田　健生
・発表分野Ⅲ類　（出場）
園芸福祉科二年　岡本　捺紀
園芸福祉科二年　小川　莉子
園芸福祉科二年　高山　陽向
・クラブ活動発表　（優秀賞三席）
農業科学科三年　椎名　果梨
農業科学科三年　廣瀬　樹
農業科学科二年　佐々木　こまち
農業科学科二年　野田　和吏

◎南北海道学校農業クラブ連盟
意見発表大会（当別高校）
・発表分野Ⅰ類
食品科学科二年　中谷　静音　（出場）
・発表分野Ⅱ類
農業科学科三年　椎名　果梨　（出場）
・発表分野Ⅲ類
食品科学科三年　小谷　梨々花　（出場）

◎日本学校農業クラブ北海道連盟
全道技術競技大会
（岩見沢農業高校）
・鑑定（作物）
農業科学科一年　鈴木　海音　（最優秀賞）
農業科学科二年　野田　和吏　（優秀賞）
・鑑定（草花）
園芸福祉科二年　岡本　捺紀　（優秀賞）
・鑑定（食品）
食品科学科三年　寺内　碧人　（最優秀賞）
食品科学科三年　中村　心唯姫　（優秀賞）
・家畜審査（乳牛）
食品科学科二年　海川　愛和　（優秀賞）

◎日本学校農業クラブ北海道連盟
全道実績発表大会（遠別農業高校）
・発表分野Ⅰ類　（出場）
農業科学科三年　七尾　茉里香
農業科学科二年　生田　雫　（出場）
・発表分野Ⅱ類
園芸福祉科二年　山田　健生
園芸福祉科二年　小林　孝太郎
・クラブ活動発表　（出場）
農業科学科三年　椎名　果梨
農業科学科二年　野田　和吏
農業科学科三年　廣瀬　樹
農業科学科二年　佐々木　こまち

◎日本学校農業クラブ全国大会
西関東大会
農業鑑定競技会
・鑑定（作物）
農業科学科一年　鈴木　海音　（出場）
・鑑定（草花）
園芸福祉科二年　岡本　捺紀　（出場）
・鑑定（食品）
食品科学科三年　寺内　碧人　（出場）

農業講演会の様子（講師　ＡＧＲＩＧＡＴＥ代表取締役 左今克憲 様）